

第5章

英国ロンドンにいるソマリ人女性たちの生計活動

須永 修枝

はじめに

ソマリ人 (Somali)¹⁾ は1980年代にソマリアで発生した紛争の結果、現在では周辺諸国のみならず、ヨーロッパや北米、中東、アジア地域など世界中に散在して暮らしている。このように、国外に暮らすいわゆるソマリ人ディアスポラ (Somali diaspora)²⁾ は、現在、100万人とも150万人とも推定される (UNDP 2009; 2011)。このうち、ヨーロッパ諸国のなかで最も多くのソマリ人が暮らしているのがイギリスであり、ひいては首都ロンドンである。英国国家統計局によると、2018年6月時点において、イギリスにいるソマリア生まれのソマリ人の数は、男性が4万4000人、女性は6万人である (Office for National Statistics 2018)。

1980年代後半以降、ソマリ人がイギリスで暮らすようになったルートはふ

-
- 1) 本章でソマリ人とは、エスニックグループを意味する言葉として用い、ソマリア国籍であるということ必ずしも意味しない。アフリカ大陸におけるソマリ人の居住地域については1-1を参照。
 - 2) 「ディアスポラ」という用語が使い始められた当初、ディアスポラとはユダヤ人の経験を示す言葉であったが、現在ではこの言葉を用いて多くの対象や状況が示されるようになったため、有効な研究概念としてディアスポラという用語をどのように用いるべきかをめぐる議論がある (Brubaker 2005; 戴 2009)。本章では、英国在住のソマリ人女性を考察するに際し、国境線を越える移動を経験した人々であることを示すためにディアスポラという用語を使用する。

たつある。ひとつは、ソマリアからイギリスに入国し、庇護を申請するというものである。ソマリアで紛争が激化した1980年代後半以降、多くのソマリ人が保護領時代から歴史的繋がりのあるイギリスで庇護を申請した。ソマリア出身者によるイギリスでの庇護申請件数は1985年から2010年までつねに上位10カ国に含まれ（Open Society Foundations 2014, 28-29）、その数は1999年に最も多い7495人を記録した（Change Institute 2009, 24）。

もうひとつのルートは、EU諸国で難民として認定されたあとにその国の国籍を取得し、EU市民に認められている移動の自由を利用してイギリスに移住するというものである。1999年以降、オランダやデンマークなどで難民認定されたソマリ人が、これらの国の国籍を取得したあとに、イギリスへ移住している（Open Society Foundations 2015, 14）。英国国家統計局によると、イギリスにいるソマリア生まれのソマリ人のなかで、イギリス国籍でもソマリア国籍でもない人の数は2001年には1000人にすぎなかった。だがこの数は、その後2018年6月には1万7000人に至っている（Office for National Statistics 2015; 2018）。このなかには、EU以外の国で国籍を取得したソマリ人も含まれるが、ソマリ人がEU市民としてほかのEU諸国からイギリスに移住しているという背景を抜きにして、この増加傾向を説明することはできない。イギリスは保護領時代からの歴史的繋がりにもとづく庇護申請国であることに加えて、EU国籍をもつソマリ人を引きつける場所となっているため、ヨーロッパで最多数のソマリ人が暮らす場所となっているのである。

本章は、ほかのEU諸国からもソマリ人が移住しているイギリスにおけるソマリ人女性の生計活動の実態と特徴について、イギリス国内のなかでも最も多くのソマリ人が暮らすロンドンでの聞き取り調査結果をもとに検討する³⁾。

近年、ソマリ人ディアスポラについては、出身地域との越境的な繋がり

3) Hammond (2013, 1006) は、2001年のイギリス国勢調査ではイギリスに住むソマリ人のうち89%がロンドンに住んでいるとなっているものの、庇護申請者や難民の居住地をロンドン以外の地域に振り分ける分散政策 (dispersal policy) により、Hammondが論文を執筆した時点では、それよりも減少していると推測している。

関する研究が行われるようになった⁴⁾。とりわけて論じられてきたのは、送金活動である。これまでの研究によって、送金の仕組みや、頻度、相手、金額などが明らかにされてきた (Hammond 2011; Horst 2004; 2008; Lindley 2009a; 2009b; UNDP 2009; 2011)。実際にディアスポラによる送金額は、ソマリアの経済規模を鑑みると看過できるものではない。その額は2015年には14億米ドルで⁵⁾、ソマリアのGDPの23%を占めるに至っている⁶⁾。ディアスポラはソマリア経済を支える重要な役割を担っているのである。しかし、従来の研究では送金をする側であるディアスポラの生計活動の在り方は論じられてこなかった。

また、近年、ソマリ人女性ディアスポラのあいだにみられる傾向として、その多くがシングルマザーになっていることが指摘されている。Open Society Foundations (2015) はロンドンとレスターを含め、ヨーロッパの7都市でソマリ人ディアスポラの生活環境を調査した結果、全体的にシングルマザーであるソマリ人女性の数が増加していると論じている。同様に、アメリカ在住のソマリ人のあいだでもシングルマザーが増加している (Connor et al. 2016)。先行研究はシングルマザーの増加を指摘する一方で、その原因については明示しておらず、彼女たちがいかにして生計を成り立たせているのかは解明されていない。

冒頭で示したように、ソマリ人ディアスポラは男性だけで構成されているのではなく、イギリスでは女性が66%を占め、男性を上回っている。ディアスポラがソマリア経済を支えているといわれるなか、人数の面でも看過できないソマリ人女性たちの生計活動については、増加しているといわれるシングルマザーのケースも含めて議論が抜け落ちている。

4) 遠藤 (2015, 213-233) は、ソマリ人ディアスポラ研究を概観しながらソマリ人ディアスポラが出身地域に対して経済的にも政治的にも関与していることを論じている。

5) 1ドル=106円 (2019年8月5日時点)。

6) 世界銀行ウェブサイト (<http://www.worldbank.org/en/news/press-release/2016/06/10/world-bank-makes-progress-to-support-remittance-flows-to-somalia>, 2019年2月4日アクセス)。

本章では、イギリスに暮らすソマリ人女性のなかでも、シングルマザーによる生計活動の実態と特徴を明らかにすることをめざす。本章の構成はつぎのとおりである。第1節では、まず、多くのソマリ人が世界中に散在するようになった原因であるソマリアでの紛争を概観しつつ、イギリスにいるソマリ人の背景を示す。つぎに、筆者がロンドンで雪だるま式標本法 (snowball sampling) によって行ったソマリ人女性22人への聞き取り調査の概要を述べ、分析視角として「複合的埋め込み論」(mixed embeddedness) を援用することを説明する。第2節では、ソマリ人女性がシングルマザーとして生計を営むうえで、イギリスの社会保障制度が大きな役割を果たしていることを示す。第3節では、EU諸国のなかでもオランダから移り住んだソマリ人女性たちの経験を例として挙げながら、イギリスでは自ら起業することが比較的容易であり、ソマリ人女性にとって自営業を営むことが重要な生計手段であることを示す。

第1節 背景，調査概要，分析アプローチ

1-1 ソマリアでの紛争とイギリスのソマリ人の背景

本章にてソマリ人と指し示す人々は、アフリカの角地域でおもに遊牧を営んできた人々であり、その内部には氏族(父系リネージ)にもとづく所属がある。ソマリ人は地域によってアクセントや用いる語彙に違いがあるもののほぼすべての人々がソマリ語を話し、イスラーム教徒である。ソマリ人が居住していた地域は、19世紀後半から植民地支配の対象となり、イギリス、イタリア、フランス、エチオピアによって分割された。ソマリ人居住地域の帰属先は宗主国の政策にもとづいて決定されたため、現在、ソマリ人はソマリア、ケニア、ジブチ、エチオピアの4カ国にまたがって生活している。

現在、国連が承認している国家としてのソマリアは、旧イギリス保護領と旧イタリア植民地が1960年に連合を形成したことで発足した⁷⁾。ソマリアの

首都は旧イタリア領に位置するモガディシオに置かれた。ソマリア議会は旧イタリア領出身者が多くを占め、モガディシオに行政や高等教育機関が集中した。そのため、連合を形成した当初から、ソマリアの北部に位置する旧イギリス保護領は周辺的な位置づけとなった (Bradbury 2008, 32-35, 53-56)。

ソマリア北部の周辺化は、1969年のクーデターによりソマリア大統領に就任した旧イタリア領出身のシアード・バーレによって加速した。バーレは氏族を利用した政治を行い、自らの出身氏族であるダロッドを優遇したのに対し、北部地域を基盤とするイサックを差別の対象とした。さらに、バーレは1977~1978年のエチオピアとのオガデン戦争に敗れると、エチオピアから逃れてきたダロッドに属するオガデン難民に北部地域の土地を提供した。そのため、イサックの不満はさらに高まった (Bradbury 2008, 53-56)。オガデン戦争のあと、イサックの不満はバーレ政権に対する武力攻撃へと至り、とくに武力対立が悪化した1988年以降、ソマリア軍による攻撃の対象となったイサックは国外へ逃れた。

その際、多くのイサックが庇護を申請したのがイギリスであった。ソマリ人のなかには、紛争以前から出稼ぎや留学生として中東諸国やヨーロッパ諸国に滞在していた人々もいたが (Hansen 2007, 133-134)、イギリスには保護領時代から多くのソマリ人男性が水夫として船渠があるカーディフやリバプールなどの港湾都市に暮らしていた。ロンドンもそのひとつであった。元水夫としてイギリスにいたソマリ人男性たちはソマリア北部で紛争が悪化すると、出身地域にいた家族を呼び寄せた。その結果、ロンドンのなかでも元水夫が生活していた地域にソマリ人が集まるようになり、1980年代後半以降、イギリスにてソマリア北部出身のソマリ人女性たちの数が増加した。

1991年5月18日にソマリア北部の旧イギリス保護領にあたる地域でソマリランド共和国の独立が宣言されてからは⁸⁾、イギリスで庇護を申請するソマ

7) 旧イギリス保護領は1960年6月26日に独立し、その5日後である7月1日に国連の信託統治が終了した旧イタリア領と合併した。

8) この独立宣言は、ソマリランドにとっては1960年7月1日に形成した旧イタリア領との連合の解消を意味している。

リ人たちは北部出身者ばかりでなくなった。現在、ソマリランドは国際的に国家として承認されていないが、独自に国家の運営をしている⁹⁾ (Bradbury 2008; 遠藤 2015, 115-142)。それに対して、1991年以降は首都モガディシオが位置するソマリア南部地域が紛争のおもな発生地となっているため、南部出身者もイギリスで難民認定されるようになったのである (Hammond 2013, 1005-1007)。イギリスには、出身地域や所属するクランが異なるソマリ人女性たちが生活している。筆者が聞き取りを行ったロンドン西部地域では、ソマリランド出身者とソマリア南部出身者が同じ地域で生活していた。

また、すでに述べたようにイギリスにはほかのEU諸国で難民認定されたあと、その国の国籍を取得したソマリ人が移住している。オランダ、デンマーク、フィンランド、スウェーデン、イギリスに住むソマリ人ディアスポラへの聞き取り調査を行い、EU諸国に居住するソマリ人の生活状況に関する調査結果をまとめたOpen Society Foundations (2015)によると、この傾向はイギリスでのみ認められるものである。van Liempt (2011a; 2011b) は、2000年以降にオランダからイギリスに移住したソマリ人の数が、正確な人数は不明確としながらも、1万人から2万人という推測値があることを示している。van Liempt (2011a; 2011b) によるオランダからロンドンやレスターに移住したソマリ人に対する聞き取り調査の結果によると、ソマリ人がオランダからイギリスに移住する理由のひとつは、よりよい就業と教育機会のためであり、もうひとつはオランダの同化政策のもとでは叶わない文化や宗教面での自由な振る舞いを望むためであるという。イギリスには、ほかのEU諸国では得られない機会を求めてソマリ人が移り住んでいるのである。

1-2 調査概要と対象者の特徴

筆者は2018年8月中旬から9月中旬までの1カ月間、ロンドン西部に位置

9) ソマリランドの治安は比較的安定しているが、ソマリランドの東に位置するソールとサナーグ地域は、1998年に旧イタリア領の北東部に樹立されたプントランド自治政府との領域問題の対象となっているため、治安が不安定な状態にある。

するイーリング (Ealing) とヒリンドン (Hillingdon) というふたつの自治区においてソマリ人女性22人に対して生計活動に関する聞き取り調査を実施した。筆者は、2014年からヒリンドンにあるソマリ人団体¹⁰⁾にてソマリランド出身者のアイデンティティに関する聞き取り調査と参与観察を実施してきたことから、2018年の調査もそれ以前からの人脈を活用するために同地域を対象とした。

1980年代後半に紛争を逃れてきたソマリ人たちが身を寄せたのは、元水夫の居住地であるロンドン東部のタワーハムレッツ (Tower Hamlets) であった。それに比べると、この地域はソマリ人が生活を始めた場所としては歴史が新しい。1990年代初頭からこの地域で暮らすソマリ人によると、1990年代後半まではこの地域に住んでいたのは「白人」ばかりであり、ソマリ人はほとんどいなかったという。しかし、近年、ヒリンドンにはヒースロー空港などでの就業機会を求めて多くのソマリ人が生活するようになってきている (Hopkins 2005)。鉄道 (National Rail) のヘイズ・アンド・ハーリントン (Hayes & Harlington) 駅から少し離れた場所にはソマリ人が経営するソマリ料理レストランや衣料品店、薬局、肉屋などが集まっていることから、多くのソマリ人が生活する場所といえる。

2018年の聞き取り調査は、これまでの人脈を活用しながら、女性ということ以外、対象者を選定する基準は設けることなく雪だるま式に行った。事前に聞き取りの約束をした場合もあったが、大半は聞き取りを終えた女性がつぎの聴取相手として紹介してくれた女性に、すぐにその場で聞き取りを実施した。ロンドンでのソマリ人女性たちの生活は、子どもの都合などで急に予定が変更されることがあるためである。渋滞や急な行き先変更により、必ずしもダイヤ通りに運行されないロンドンの交通事情も考慮した。聞き取りをした場所は、ソマリ人団体の事務所や、ソマリ人女性たちが買い物や世間話

10) この団体は、イギリスのボランティアセクターに該当し、イギリス政府機関であるチャリティ委員会 (The Charity Commission) にも登録されている。

をする場所となっているソマリ衣料品店である。録音することを許可された場合もあれば、断られた場合もあるが、どちらにしてもその場で聞き取り内容を書き取ることは可能であった。すべての女性たちに対して、聞き取りはおもに英語で行ったが、部分的にソマリ語を用いながら進めることもあった。

筆者が2014年から調査をしてきたヒリンドンにあるソマリ人団体は、ソマリ人のなかでもソマリランドにつながりをもつ人々によって運営されているが、今回の聞き取り対象者の出身地域に大きな偏りはみられなかった。対象者22人の出身地の内訳は、ソマリア南部が8人（このうち1人は旧イタリア領出身の両親のもとにイギリスで生まれた2世）、ソマリランドが14人（このうち2人はケニア出身だが父親が旧イギリス保護領出身者）であった（付表を参照）。

出身地域での経験や現在の出身地域とのかかわり方については、ソマリ人団体の事務所を借りた場合や、衣料品店にて対象者と一対一で聞き取りをした際には聞くことができた。しかし、すべての聞き取りを対象者のプライバシーが守られるような状態で行うことはできなかった。とくに、ソマリ人女性にとっての社交場でもある衣料品店では、客は買い物をするだけではなく、そこに用意されている椅子に座ってしばらく過ごしていくことが多かった。出身地域と所属クランには重なり合う部分が大きいため、なかには、出身地域を聞くこと自体が所属するクランの違いによって差別する「クラン主義者」(Qabiyalad) だととらえられることもあった。そのため、出身地域での経験やかかわり方については状況に応じて聞き取りをした。

調査対象者の特徴としては、比較的高い就学歴、婚姻状態における高いシングルマザーの比率、他EU諸国からの移住者の高い割合、自営業を生計活動とする者が多いことが挙げられる。第1に、対象者の出身地での就学歴については、70代の2人がイスラーム教を学ぶマドラサのみに通っていたが、それ以外の人々は初等教育や中等教育を受けた経験をもっていた¹¹⁾。庇護国

11) 聞き取りをした女性たちが出身地域で世俗教育を受けた背景として、バーレ政権期に女性が世俗教育を受ける機会が広がったことが考えられる。Horst (2017) が論じているように、バーレ政権期には女性の社会進出を促す政策が実施されており、女兒の教育機会も広がっていた。

での就学歴に関しては、イギリスを含むヨーロッパの庇護国でその国の言語を学んだり、職業訓練校に通った経験をもつ女性たちもいた。難民認定されたあとに大学を卒業した人は4人いた。そのうち2人は中等教育を修了したあとすぐに大学に進学し、残りの2人は結婚や出産を経たあとに大学へ進学し学位を得ていた。第2に、聞き取りをした女性たちの婚姻状態について、10人が実質的にシングルマザーとして未成年者を含む子どもと暮らしており、最も多かった¹²⁾。続いて婚姻関係にあり夫と同居しているのが8人、出身地域で離婚または死別したのが3人¹³⁾、不明(回答なし)が1人となっている。第3に、イギリスで暮らすようになった経緯については、13人がイギリスでの庇護申請や家族再統合によるものであるが、EU国籍者としてイギリスに移住した者も7人おり、高い割合を占めているといえる。EU国籍者の内訳は、オランダが5人、ドイツとスウェーデンがそれぞれ1人であり、全員が2000年代に入ってからイギリスに移住していた。第4に、生計活動については自営業が10人と最も多く、続いてパートタイムが6人、フルタイムが3人、年金受給者が2人、失業中が1人であった。

1-3 分析アプローチ——複合的埋め込み論——

本章では、とりわけソマリ人女性たちの自営業という生計活動を考察するための分析視角として、移民による起業活動を分析する際に用いられる「複合的埋め込み論」(mixed embeddedness)を援用する。この概念は、オランダにおける移民の起業活動を分析したKloosterman, van der Leun and Rath

12) 本章にて「シングルマザー」とは、必ずしもイギリスやほかのヨーロッパ諸国の世俗的な制度、法律に則った状態を意味していない。イスラーム教徒であるソマリ人は、宗教的な意味で「離婚」状態にある場合にもシングルマザーという言葉を用いている。ロンドンにいるソマリ人女性たちがシングルマザーという言葉を用いる場合、世俗的な制度としての離婚と宗教上の離婚のどちらを意味しているのかは必ずしも自明ではない。

13) この女性たちは60歳以上の高齢者でひとり暮らしをしていた。子どもがいたのは3人中1人のみであり、その場合でもすでに子どもは結婚して自らの家庭をもっていた。

(1999) によって提唱された。彼らは、この概念を用いることで、移民による起業活動には個人の能力や人間関係のみではなく、起業する場所の経済環境や政治制度が混じり合いながら影響していることを考察に組み込む必要があると主張した。それ以前の議論が、移民による起業活動を起業家もつ教育経験や人間関係といった個人的資質に着目して考察していたのに対し、この分析アプローチの特徴は移民の起業活動を分析するためには、移民が起業する場所の社会、経済および政治面での機会構造 (opportunity structure) にも注目していることである。

現在、世界的に移民を排斥する現象が生じており (新川 2017; 樽本 2018a), それはイギリスも例外ではない。イギリスへの移民の流れは時代とともに変化し、それに伴って多文化主義政策の在り方がイギリスでつねに検討の対象になってきた (佐久間 2007; 島田 2017; パナイー 2016; 樽本 2018b)。とりわけ近年は、安達 (2013) が論じているように、リベラル・ナショナリズムにもとづく社会統合政策が進められる状況において、移民のなかでもイスラーム教徒の社会的位置づけが関心事項となっている。イスラーム教徒であるソマリ人にとって、イギリスで生活することに問題がまったくないとはいえない。それにもかかわらず、ほかのEU国籍者はイギリスへ移住しているため、その具体的な理由を検討する必要がある。

ソマリ人女性の生計活動を分析する際、複合的埋め込み論というアプローチを採用することで、移民を取り巻く機会構造にも目を向け、イギリスにおけるソマリ人女性たちの生計活動の特徴を明らかにすることができる。

本章はつぎの2点を検討課題とする。ひとつは、ロンドンに居住しているソマリ人女性のなかでも高い割合を占めるシングルマザーの生計活動の実態を解明する。もうひとつは、EU国籍者がイギリスに移住していることに注目し、イギリスのいかなる環境が人々を引きつけているのかを、聞き取り結果にて最も多かった自営業という生計手段と関連付けて検討する。これらの検討を通じて、イギリスに住むソマリ人女性がいかにして生計を営んでいるのかを明らかにする。

第2節 シングルマザーとしての稼得者を支える社会保障制度

2-1 ソマリ人女性と男性の関係

ソマリ人女性ディアスポラのなかでシングルマザーが増加傾向にあることが指摘されてきたように、聞き取り調査でも22人中10人が実質的にシングルマザーであった。シングルマザーであることはロンドンのソマリ人女性たちにとって珍しいことではない。筆者がソマリ・レストランやソマリ人女性I（付表を参照。以下同様）が営む美容院などで居合わせたソマリ人女性たちと話していた際にも、彼女たちはロンドンに住む多くのソマリ人女性がシングルマザーであると話していた。

結婚生活において、ソマリ人女性がソマリ人男性に最も期待していることのひとつは、男性が稼得者としての役割を果たすことである。たとえば、女性Mは、筆者がヒリンドンにて調査を始めた2014年時点では、夫と4人の子どもたちとともに生活しており、筆者も彼女の夫と話す機会がしばしばあった。しかし、2018年に女性Mに聞き取りをした際には、彼女はシングルマザーになったと話した。女性Mはその理由を、夫が働かなくなったためだと話した。なお、ロンドン在住のソマリ人男性が働かないことについては、シングルマザーの女性にかぎらず、ほかのソマリ人女性たちも言及していた。ロンドンのソマリ人女性はソマリ人男性に対し、結婚後は家計を支える主軸となることを求めていると考えられる。

ロンドンで暮らすソマリ人女性が稼得者としての役割をソマリ人男性に期待する理由は、彼女たちの出身地域で性別にもとづく役割分担が行われてきたためである¹⁴⁾。ソマリ人女性たちの出身地域で紛争が激化する1980年代後

14) 現在、ソマリ人女性たちの出身地域でも、性別役割分担に変化が生じている。紛争が勃発して以降、女性は稼得者として家計を支えつつ家族の世話をするようになった (Abdi 2007; Ingiriis and Hoehe 2013; El-Bushra and Gardner 2016)。男性が紛争で殺害されたことや、家族を置いて逃げ出したことに加え、彼らは家にいる場合でも働かず、子

半まで、地方で遊牧をするソマリ人は、男性がラクダの世話を担当し、女性たちが、子どもを産み育てることに加え、家族のための食事作り、羊やヤギの世話、家 (hut) の組み立てと解体、家を覆うためのマット (grass mats) 作りなどをすることで生活していた (Lewis 1962; Abdi 2007; Ingiriis and Hoehne 2013)¹⁵⁾。また、植民地時代から一部の地域では生活が都市化したことで、中流階級の女性は子育てや家事、宗教学習に専念するようになり、経済的な活動は男性が行うようになった (Abdi 2007; Ingiriis and Hoehe 2013)。地方と都市で女性たちの生活様式は異なるが、家計を中心的に支える役割は男性が担うものになっていったため、ロンドンでもソマリ人女性たちはソマリ人男性に対し一家の稼ぎ手となることを望んでいる。

その一方で、イギリスにおけるソマリ人の失業率は高いため、ソマリ人男性が女性の期待通り、一家の稼ぎ頭になることは難しい。ソマリ人の雇用率はイギリスの移民グループのなかで最も低い (Change Institute 2009, 33)。低い雇用率の原因としては、教育レベルや語学力の不足、雇用システムについての理解不足や不慣れ、差別などさまざまな要因が考えられ、イギリスで生活するソマリ人にとって就業先を得ることは容易ではない (Open Society Foundations 2014, 66-80)。したがって、ロンドンでソマリ人男性は働かないと言い切れるのかは疑問の余地が残る。ソマリ人男性たちは働かないのではなく、働くことができないのではないかと考えられる。

しかし、ソマリ人女性たちにとっては男性が働かないことに変わりはない。彼女たちによると、ソマリ人男性は結婚しても働かず、家事もしないという。しばしばソマリ人女性たちは、妻は夫が必要でなくなった場合には、黒いビニール袋に夫の荷物を入れて家から追い出すという笑い話をしていた。

どもの世話や家事をしないためである (Abdi 2007; Ingiriis and Hoehe 2013; El-Bushra and Gardner 2016)。ソマリ人男性は女性の役割とされる家事や育児を担うことを拒絶し (Ingiriis and Hoehe 2013)、自らの教育や経験に見合った仕事以外をしようとはしない (El-Bushra and Gardner 2016)。Ingiriis and Hoehe (2013, 328) は、この状況によってソマリアでソマリ人女性は「二重の負担」を負っていると表現している。

15) ソマリ人の遊牧生活に関しては、Lewis (1961; 1962) を参照のこと。

伝統的なソマリ人社会は家父長制であるために男性に権力が集中している。公の場での意思決定は男性の領域とされており (Abdi 2007; Ingiriis and Hoehe 2013; El-Bushra and Gardner 2016), また家庭においても, 夫が妻よりも権力をもち, 決定権をもっている (Lewis 1962; Connor et al. 2016)。他方で, El-Bushra and Gardner (2016) が論じているように, ソマリ人男性の男性性 (*raganimo*) は, 男性の日々の努力によって構築される。その取り組みをとおして彼らは社会的および家庭内で尊敬される対象になるのである。しかし, ロンドンのソマリ人女性たちは男性たちが努力しているとは評価していないため, 女性Vは, 「(ロンドンにいるソマリ人) 女性たちは (ソマリ人) 男性を尊敬の対象とはみなさなくなっています」と話した。

ロンドンでソマリ人男性が稼ぎ手としての役割を果たさないため, 自らがその役割を担うようになっていくとソマリ人女性たちは考えている。女性Dは彼女の故郷と現在の彼女の様子を比較しながら, つぎのように話した。

女性D: 本物のソマリ女性はここにはいないですよ。本物の女性は故郷にいます。

筆者: でも, あなたは女性ではないのですか?

女性D: 私は, 中間です。

彼女は, ロンドンでの彼女の生活では性別にもとづく役割分担が実現されていないため, もはや自分は「本物の女性」ではなく女性でも男性でもない「中間」と自称したのである。

他方で, 筆者がこれまでの調査にてソマリ人男性と話している際に彼らから聞くことができた意見は, ロンドンのソマリ人女性は男性に対して貴金属や家の購入を求めるなど, 男性にとって大きすぎる要求をするようになっていくというものである。ソマリ人女性もつソマリ人男性への期待は, 稼働者としての責任を果たすことであるが, それ以上のことが要求されていると男性にはとらえられている。結婚生活に関して男女間では意識の違いがある

ものの、ソマリ人男性はイギリスで職を得ることが難しく、稼得者としての役割を果たせずにいる。女性たちは生計を維持する必要に迫られて、自ら生計手段を見つけなければならないのである。

2-2 シングルマザーの生計を支えるイギリスの社会保障制度

イギリスの労働市場で職を得ることが難しいのはソマリ人男性に限ったことではない。むしろ子育てなどを行っている女性は、男性よりも就労が困難である（Open Society Foundations 2014）。この状況でソマリ人女性がシングルマザーとなることを選択できる背景には、イギリスの社会保障制度がある。シングルマザーである女性Mはつぎのように語った。

故郷では男性が経済的な支えですが、ここでは経済的には政府のサポートがあります。男性は何も生み出さず、責任を果たしていません。です。女性には夫に感謝しようとはしません。

この発言からわかるのは、女性たちがイギリスの社会保障制度を利用して給付金を受給していることである。ソマリ人女性たちはイギリスの制度を利用することにより、経済的にはシングルマザーとしての生活を選択することができるのである。ここでは、イギリスの社会保障制度に焦点を当てて、ソマリ人女性Mがいうところの政府の経済的なサポートを概観する。

イギリスの福祉国家政策は、多文化主義政策と同様に歴史的に変化してきた。とくに、1997年のブレア政権期に「福祉から就労へ」政策がとられ、人々の就労を促すために社会保障制度の改革が進められた（所 2012; 井上 2014）。2012年には、人々に対し就労への意欲を高め、複雑化した給付制度の在り方を見直すために福祉改革法が成立し、2013年からはそれまでの給付制度を一本化したユニバーサル・クレジット（Universal Credit）が段階的に導入されるようになった（井上 2014）。

ユニバーサル・クレジットには、それ以前まで個別に運用されていた児童

税控除 (Child Tax Credit), 住宅手当 (Housing Benefit), 所得補助 (Income Support), 求職者給付 (income-based Jobseeker's Allowance: JSA), 求職・支援給付 (income-related Employment and Support Allowance: ESA), 就労税控除 (Working Tax Credit) が含まれる。現在は, これら個別の給付および控除制度から, ユニバーサル・クレジットへの移行が行われている段階である。すでに個別の制度を利用している場合にはユニバーサル・クレジットを申請することはできず, 基本的には労働年金省 (Department for Work and Pensions) からの通達によってユニバーサル・クレジットへ移行される。申請者の要件は, 低収入または失業していること, 18歳以上であること¹⁶⁾, 申請者あるいはそのパートナーが年金受給年齢以下であること, 申請者とそのパートナーの資産が1万6000ポンド以下¹⁷⁾ であること, イギリスに住んでいることである。

基本的な月額を受給額は, 25歳未満の単身者で251.77ポンド, 25歳以上の単身者で317.82ポンド, カップル¹⁸⁾ で2人とも25歳以下では2人合わせて395.20ポンド, カップルでどちらかが25歳以上であれば, 2人合わせて498.89ポンドである。これに加えて, 子どもがいる場合には子ども1人当たりの月額受給額が加算される。基本的には1人目の子どもが2017年4月6日より前に誕生した場合には277.08ポンド, それ以降に誕生した場合は231.67ポンド, 2人目以降については子ども1人当たり231.67ポンドが支給される。また, 子どもに障害がある場合, 受給者自身に障害や健康上の問題がある場

16) 16歳または17歳が申請する場合には別途要件が定められている。たとえば, 子どもや重度の障害をもつ人々の生活を支える責任を有している場合や, 妊娠している場合などには16歳または17歳であってもユニバーサル・クレジットを申請することができる (イギリス政府ウェブサイト; <https://www.gov.uk/universal-credit/eligibility>, 2019年7月30日アクセス)。

17) 1ポンド=130円 (2019年8月4日現在)。

18) 雇用年金省は, カップルについて, 婚姻関係や同性婚, 事実婚関係にある2人の人間が同居している状態と定めている (イギリス政府ウェブサイト; <https://www.gov.uk/government/publications/universal-credit-and-couples-an-introduction/universal-credit-further-information-for-couples>, 2019年7月30日アクセス)。

合、受給者が重度の障害をもつ人の面倒をみている場合には、別途、給付金額が定められている。なお、従来の住宅手当はユニバーサル・クレジットに組み込まれたが、ユニバーサル・クレジットのシステムでは、受給者の年齢や生活状況に応じて家賃や住宅ローンの利子の支払いなどに対して支給される住宅費手当 (Universal Credit Housing Costs) が別途、設けられている。

ユニバーサル・クレジットの受給者は、就労コーチ (work coach) とのあいだで、受給者責任 (Claimant Commitment) に合意し、それにもとづいて履歴書の作成や求職活動、職業訓練を受けるなどの義務を果たす必要がある。しかし、片親として、もしくはカップルであっても子どもの世話をおもにみている受給者である場合には、末子の年齢に応じて求められる要件が異なる仕組みになっている。

また、ユニバーサル・クレジットとは別に、児童手当 (Child Benefit) なども給付される。16歳未満の子 (もしくは一定の条件を満たす教育や訓練を受けている20歳未満の子) をもつ親に対して、収入が5万ポンドを超えない場合の給付額は、長子もしくはひとりっ子には週に20.70ポンド、それ以降の子どもに対しては1人当たり週に13.70ポンドである。

ユニバーサル・クレジットによる子ども1人当たりの加算額や住宅費手当、児童手当を組み合わせれば、ソマリ人女性たちはシングルマザーであっても何とか生活を成り立たせることが可能となる。

2-3 直面している課題

シングルマザーであるソマリ人女性たちは、経済的にはロンドンで生活を成立させることができる。しかし、イギリスの社会保障制度によってすべての問題が解決されるわけではない。ここでは、社会保障制度により経済的には支援を受けることができる住宅と子育てに関する問題をとりあげる。

ひとつ目の問題は、ロンドンでソマリ人女性たちの住宅費用は手当の対象となるものの、その住環境の安定は保障されないことである。住宅費手当の対象は、住宅を民間の大家 (private landlord) から借りている場合は家賃、地

方自治体や住宅供給組織 (housing association) から借りている場合には家賃と管理費、住宅を所有している場合は住宅ローンの利子やそのほかの手数料である。この制度はあくまでも経済的補助のためであり、受給者の住む場所を保障するものではない。そのため、ソマリ人女性たちの住環境はつねに不安定である。

彼女たちの大半は持ち家ではなく、地方自治体または民間の大家から住宅を借りている。聞き取り対象者についても、持ち家に住んでいるソマリ人女性はひとりのみであった。また、ソマリ人女性たちは地方自治体によって供給される住宅を好むものの、部屋数にかぎりがあるため、多くの場合、彼女たちは民間の大家から住宅を借りることになる。そこでしばしばソマリ人女性たちが直面するのが、大家による賃料の急な値上げや立ち退きを強いられる状況である。筆者は、急に大家から立ち退きを求められ、同じ自治区内であるがまったく馴染みのない地に移り住むことになった女性や、一時的に車で生活することになった女性をこれまで何度もみてきた。この聞き取り調査を実施している際も、大家に賃料の値上げを要求されたため、新しい家を探している女性がいた。

ソマリ人女性Rは、シングルマザーとして子育てをしながら、昼間は自ら経営しているソマリ衣料品店で働いている。彼女は大家から家を借りており、住宅費を賄うために手当を利用しながら大家に家賃を支払っていたが、急に大家が賃料を増額すると言い出したという。これに対し、今までの家賃補助額では家賃を賄うことができなくなり、彼女はすぐに新しい家を探す必要に迫られていた。また、過去に住居の問題を抱えたことのあるソマリ人女性Sは、ロンドンでは住宅が不足しているため、大家の権限はとて強く、彼女たちは大家に対して文句を言うことはできないと語った。

ソマリ人女性たちが直面するもうひとつの問題は、子育てをめぐるものである。シングルマザーのソマリ人女性たちは、稼得者としての役割をひとりで担いながら、複数の子どもを育てるために、さまざまな悩みを抱えている場合が多い。しかし、彼女たちは抱えている悩みを公の機関に相談すること

はほとんどない。

イギリスには家庭内の問題について対応する、社会サービス (social services) と呼ばれる部門が地方自治体にあるものの、ソマリ人女性たちは社会サービス部門が家庭に介入することで、ソマリ人の価値規範が失われることを懸念し、これを回避しようとしている。筆者が2014年に行った調査では、あるソマリ人女性は「ソマリ人女性たちは社会サービスを恐れ、社会サービスに子どもたちをとられないようにしています」¹⁹⁾ と話していた。さらに別のソマリ人女性は、「この国では子どもは政府のものであり、子どもたちは親の言うことを聞かなくなっている」²⁰⁾ と言い、子どもが親を尊敬するソマリ人家族の在り方がなし崩しになっていることを嘆いていた。

住環境や子育てをめぐる問題、そしてシングルマザーとして家計を支える責任の重さにより、ソマリ人女性たちは精神的な不調を抱えている。たとえば、ソマリ人女性Sは、かつてロンドンの病院でパートタイムの看護師として働いていたときの様子をつぎのように話した。

病院には、身体の不調を訴えるソマリ人女性が多く来ました。しかし、彼女たちを検査すると身体的には何の問題もないのです。このとき、医師は彼女たちの身体の不調は精神的なものであると私に話しました。

そして女性S自身も、聞き取りをした2018年時点にて子育てを含む自らの生活に行き詰まりを感じていると話した。スウェーデン国籍をもち、ロンドンに来る前はアメリカで夫と子どもたちと生活していた彼女は、夫と離婚して姉の住むロンドンに子どもたちとともに移住した。シングルマザーとして子どもたちと生活している彼女は、近所に住む姉にはなんでも話すことができると言い、看護師として働いている姪たちとも時間が合えば一緒に過ごし

19) フィールドノート (2015年2月6日) より。

20) フィールドノート (2015年1月23日) より。

ている。それでも、彼女は今の生活に行き詰まりを感じているという。女性Sは、ソマリ人女性たちは誰かに悩みを相談することはほとんどないと話した。ソマリ人女性たちは精神的に厳しい状況にあるものの、ゴシップの標的になることを恐れているのである。

ロンドンでシングルマザーとして生きるソマリ人女性たちの生計は、イギリスの社会保障制度を利用することで支えられているが、彼女たちの精神的な安定は保障されていない。ソマリ人女性Sは生活に疲れていると言いつつも、生活するためには動き続けるしかないとも話していた。

Open Society Foundations (2015) が示しているように、イギリスにかぎらずEU諸国ではソマリ人の失業率が高い一方で、シングルマザーの数は増加傾向にある。本節で考察したように、イギリスにてシングルマザーであるソマリ人女性たちの生計が社会保障制度によって支えられていることを鑑みると、福祉国家であるほかのEU諸国でも各国の社会保障制度とシングルマザーの増加には関連性があると考えられる。ソマリ人女性ディアスポラは、従来のソマリ人の性別役割分担が機能しない状況で、家計だけではなく子育てや住環境に対する責任をひとりで担っている。社会保障制度を利用することで生計を成立させることができるため、シングルマザーという生き方を選択する人々が増えているものの、彼女たちはそのことにより精神的な不調に直面しているのである。

第3節 EU国籍者のイギリスへの移住と起業する女性たち

3-1 ロンドンに移住する人々

ヨーロッパで最も多くのソマリ人が暮らすイギリスには、ほかのEU国籍をもつソマリ人が多く移住している。筆者による聞き取り調査でも、7人のソマリ人女性がEU国籍者としてイギリスに移り住んでいた。オランダ国籍が5人、ドイツ国籍が1人、スウェーデン国籍が1人である。本項では、聞

き取りをしたEU国籍者のなかで最も数が多かったオランダから移住してきたソマリ人女性たちをとりあげ、移民排斥と就労機会の観点から、彼女たちがイギリスに移り住んだ理由を検討する。

オランダでは移民が就労することが難しくなっている。オランダにおける福祉国家の特徴を分析した水島（2019）によると、オランダ福祉国家の再編は移民を排除しながら進められているために移民の就労が困難になっている。オランダ経済が脱工業化したことで、言語を用いたコミュニケーション能力が重視されるようになった結果、その能力があるオランダの女性や高齢者が労働市場に包摂される一方で、言語能力が劣る移民は排除されるようになったためである。筆者による聞き取りでは、オランダにおける実際の生活で、移民は十分な言語能力があっても希望する職を得られない状況に直面していることが語られた。オランダから2006年にイギリスへ移住し、語学能力に長けた女性Gはつぎのように話した。

オランダで働こうとすると、工場での仕事ばかり紹介されました。私はもっと創造的な仕事をしたかったです。

女性Gはオランダでは希望する仕事につくことができず、「白人」オランダ人だけが仕事を選ぶことができると話した。ロンドンでは単発的に通訳の仕事をしている女性Gは、ソマリ語、英語、アラビア語、オランダ語、ドイツ語を話すことができるという。語学力が高い女性Gであっても、オランダで希望する職につくことはできなかつたのである。

オランダでは、たとえオランダ社会に適応できたとしても、ソマリ人を含めて移民の背景をもつ人々が職を得ることが困難な状況が生じていると考えられる。語学力に長けた女性Gは、文化的にもオランダ社会に統合されていたといえる。筆者は2014年から女性Gと知り合いであり、彼女は筆者に対し、しばしばオランダでの生活を懐かしむように話すことがある。今回の聞き取りの際も、彼女はオランダで生活していた際には、「白人」オランダ人

の友人がたくさんいたのに対し、ソマリ人の友人はほとんどおらず、ロンドンで彼女が身に着けているようなヒジャーブやアバヤを着ることはなかったと言った。実際に、彼女がオランダで生活していた当時の写真には、トレーナーとジーンズ姿で、髪の毛は覆われていない姿が映っていた。語学力だけではなく、振る舞いや服装の面でも、女性Gはオランダ社会に適応していたと考えられるが、彼女は望む仕事につくことができなかった。

この点に関連して、オランダの大学で学位を取得し、オランダ国籍をもつソマリ人女性Tはロンドンに移り住んだ当時の衝撃を例に出してつぎのように語った。

オランダでは（移民に対して）たくさんの箱を設けています。それを打ち破るのはとても大変なことです。統合はとても困難なことで、職を得るためには教養のある多くの人々と争わなければなりません。私はロンドンに移り住んで、口座を開設しようと銀行に行った際、黒人男性が「私はマネージャーです。何かお手伝いしましょうか」と声をかけてきたときにとっても驚きました。オランダでは有色の人がマネージャーである状況を一度もみたことがありません。バスの運転手もロンドンではいろいろな人がいますが、オランダでは違います。オランダでは私たちはアウトサイダーだと考えられているのです。

女性Tは、ソマリ人が四方を囲まれ身動きが取れない状況を示す言葉として、「箱」という表現を用い、ソマリ人は箱に囲まれるのが嫌いなため、イギリスに移り住む人々が多いと話した。ソマリ人女性たちは、オランダでは語学能力や教養の高さが問題になる以前に、そもそも移民であるために希望の職につくことができないと考えているのである²¹⁾。

21) オランダにいる移民のなかでも、イスラーム教徒であるソマリ人は差別の対象になる傾向がある。van Liempt (2011a, 259-260) はオランダからイギリスのレスターに移住したソマリ人女性の例を挙げながら、2004年11月にオランダ人のテオ・ファン・ゴッ

ソマリ人が就職活動で困難に直面する状況はイギリスも同じである。イギリスで、ソマリ人の雇用率は移民グループのなかでも低い状況にある。前節で述べたように、ロンドンにてソマリ人男性が稼得者としての役割を果たすことができない理由のひとつには雇用率の低さがある。これまで筆者がロンドンで調査しているあいだにも、男女の別なく複数のソマリ人が指摘していたのは、就職活動で履歴書を提出してもイスラーム教徒であることが名前によって判断されるため、面接にも呼ばれないという状況であった。採用する側がイスラーム教徒を差別しているのかわからないが、少なくともソマリ人たちは自身はイスラーム教徒であることが就職を困難にしている理由だと考えている。イギリスでは社会統合が論じられる際に、1980年代からイスラーム教徒の存在が注目されてきた(安達 2013)。2005年7月7日に発生したロンドン同時爆破事件²²⁾に2人のソマリ人がかかわっていたことも相まって、イギリスでもソマリ人の生活は難しくなったといわれている(van Liempt 2011a)。このような状況で、イギリス在住のソマリ人が、既存の労働市場で職を得ることを難しいと考えても不思議はない。

オランダとイギリスのあいだにある大きな違いは、イギリスでは就労の場を自ら作り出せる機会が開かれていることである。レスターで自営業を営むソマリ人について調査をしたRam, Theodorakopoulos and Jones (2008)は、オランダにかぎらず大陸ヨーロッパ諸国では起業をするに際して多くの規制があるが、イギリスは「アングロ・サクソン領域」(Ram, Theodorakopoulos and Jones 2008, 431)であり、規制が少ないためにビジネスを展開する自由があると述べている。実際に、近年はイギリスのなかでもロンドンにおいて新しく来た移民による起業活動が増加しているという報告がある(Sepulveda,

ホが殺害された事件(イスラーム教における女性差別を批判する映画を作ったファン・ゴッホが、オランダ国籍をもつモロッコ系移民2世の男性に殺害された)後、ソマリ人がオランダで生活することが難しくなったと論じている。

22) 朝の通勤時間帯に、ロンドンの3カ所の地下鉄と2階建てバスがほぼ同時に爆破され、4人の犯人を含む56人が死亡し、約700人が負傷した事件。

Syrett and Lyon 2011; Jones et al. 2014)。

イギリスはオランダよりも起業が容易であることについては、筆者による聞き取りで女性Rも話した。オランダからイギリスに移住した女性Rは、オランダでは夫がおり、その夫とのあいだに5人の子どものを儲け、オランダでは家事のみをしていた。2013年に職を得る機会を求めて家族でロンドンに移住すると、彼女は1年間、清掃の仕事をしたあと、2016年にソマリ衣料品店を開業した。他方で、夫はロンドンに移住したあと、仕事をする事はなかった。彼女は夫と別居し、シングルマザーとして末子とそのすぐ上の子どもの世話をしながら衣料品店を営んでいる。女性Rに対し、なぜオランダではなくロンドンで衣料品店を開いたのかを尋ねると、彼女はオランダでは起業するためには多くの書類を準備する必要があると述べ、つぎのように答えた。

オランダではシステムが複雑ですが、ロンドンでは簡単です。

van Liempt (2011a) によると、オランダで起業するためには、「言語を理解し、十分な教育があることを示し、ビジネスプランを書き、それを商業会議所 (the Chamber of Commerce) に提出し、起業の許可を仰ぐ必要がある」(van Liempt 2011a, 258) という。また、Kloosterman (2003) が論じているように、コーポラティストの伝統が強いオランダでは、パン屋や精肉店を開業するためには、特定の団体のメンバーになることが求められる場合もあり、これが新規参入者にとっては障壁として機能する。そのため、ソマリ人女性Rはオランダで起業する際の手続きを「複雑」だと述べたと考えられる。

Kloosterman (2003) は政府による規制緩和と政策の導入や、政策遵守の監視により、オランダで移民が起業する機会は増えると論じている。しかし、水島 (2019) が明らかにしているように、移民を排除しようとする動きを強めている近年のオランダ政治の特徴を鑑みると、規制緩和について政策レベルでの対応を期待することは難しい。ソマリ人にとって、オランダでは仕事をすることも、仕事を作り出すことも困難であるといえる。

これに対し、イギリスでは起業をすることが比較的容易であり、ソマリ人たちにとって生計活動の選択肢が多い場所として魅力的な移住先となっている。次項で示すように、実際にロンドンでは多くのソマリ人女性たちが生計を成り立たせるために自ら起業することを選択している。

3-2 起業する女性たち

ソマリ人女性が経営する衣料品店などで聞き取り調査を行ったため多少偏りがあることは否めないが、調査対象者22人中10人が自営業を営んでいた。ソマリ人女性にとって、自営業は時間の融通が利く生計活動として好まれている。とくに、シングルマザーにとっては、子どもが小さければ小さいほど、決まった時間に働くような仕事と子育ての両立は難しい。聞き取り調査では10人のシングルマザーのうちフルタイムの仕事についていたのは1人²³⁾のみであり、自営業を営んでいたのは5人であった。シングルマザーとしてひとり息子を育てている女性Iは、2018年7月に美容院を開業した理由をつぎのように述べた。

以前の職場では息子が体調を崩した際に、上司に電話をして仕事を休まなければならなかったことが何回かありました。そのこともあり、仕事を辞めました。そして、自分に何ができるか考えた時にヘアアレンジをすることが好きであったこと、自分の店をもてば息子との時間もとることができると思い、この店を開くことにしました。

子育てをしているソマリ人女性たちにとって、自分の店をもつことは最も融通の利く経済活動といえる。子どもを学校に送り出してから午前中に店を開ける人もいれば、子どもが学校から帰ってきてからの時間帯である午後3

23) ソマリ人女性Eは、ほかのソマリ人女性が運営するケアビジネスの会社で働いている。彼女は4人の子どもと暮らし、末の子どもは17歳であることから子育てに多くの時間を割く必要はない。

時半や4時頃に子どもと一緒に来て店を開ける女性もいた。彼女たちは自身の生活スタイルに合わせて店を運営しているのである。

また、前述のようにイギリスの社会保障制度は子どもをもつソマリ人女性たちにとって経済的な支えとなっているが、子どもが一定の年齢に達すると支給額は減少する。そこで、子どもが成長するにしたがって、女性たちのなかには自営業を営むことにより自ら生活資金を生み出そうとする動きもみられる。2013年からソマリ衣料品店を営むシングルマザー女性Nには3人の子どもがおり、末子は20歳であった。彼女は自分の店を始めた理由をつぎのように話した。

ここ（イギリス）で生まれておらず、この国で教育を受けていなければ、いい職業につくことはできません。私にとってはこれ（店を開くこと）がお金を得るための簡単な方法です。もう子どもたちは大きくなりました。子どもたちが小さいときには政府が親切に助けてくれますが、子どもたちが成長したら誰も助けてくれません。

女性Nは、子どもたちが成長するにつれて自分で生活費を稼ぐことを考えるようになったという。彼女は自分の店を開く2年前に、現在、彼女が営んでいる店とは異なる場所でインド人と店舗の一部を共有して小さな衣料品店を開業し、そこでビジネスについて少しずつ学んでいったと話した。子どもが成長すると児童手当や児童税控除の対象から外れ、住宅費手当についても支給額が減るため、女性たちは生計を支えるほかの手段を探す必要がある。そのひとつの手段として選択されているのが自ら起業することである。子どもをもつソマリ人女性たちにとって、自営業を始めることは自分で時間を管理しやすいという理由だけでなく、イギリスの社会保障制度とも関連しているのである。

自営業を営んでいる10人のうち最も多い7人がソマリ衣料品店を経営していた。ソマリ人女性たちが衣料品店を開くことは難しくない。商品の仕入れ

方法はすでに整い、一定の需要も見込めるためである。衣料品店では、ソマリ人女性が身に着けるディラ (*dirac*) という服や、イスラーム教徒の女性が纏うヒジャーブやアバヤ、そのほかに装飾品や香水、化粧品などが売られている。女性Nによると、商品の仕入れは、ドバイにいる友人や家族に頼んで商品を送ってもらうこともあれば、自らドバイに買い付けに行く場合もあるという。また、筆者が他の衣料品店にて聞き取りをしているあいだには、卸売り業者が商品の売り込みに来たり、注文された商品を届けに来ることもあった。卸売り業者にはソマリ人だけでなく、ほかのイスラーム教徒も含まれている。近年は中国系の業者が店に来ることもあるらしく、筆者は一度、中国系の卸売業者かと勘違いされたことがあった。このように、ソマリ人女性は衣料品店を始め、運営するに際し、既存の方法を活用することができるのである。

また、ソマリ人相手の衣料品店を開くために高い語学力や資金力は必要ない。ソマリ衣料品店が集まる場所は通りすがりに見つかるような場所にはないため、賃料が安い。多くの店舗は間口が小さく奥行きが広い、いわゆるウナギの寝床のような場所に集まっており、店主は建物の所有者と契約をし、毎月の賃料を支払いながら店を運営している。ソマリ人女性にとって、日常的に身に着けるディラを買うことができる場所はソマリ衣料品店以外にはないため、一見わかりにくい場所に店があってもソマリ人女性たちは買い物をしに集まる。他方で、ソマリ衣料品店にはソマリ人以外の人々が客として来ることほとんどないため、聞こえてくる言葉はソマリ語であり、英語を使う機会は極めて少ない。上記の女性Nは、2013年に自分の店をもつに際し現在の場所を選んだ理由として、ほかの場所と比べて賃料が安かったことやほとんどの客がソマリ人であるためだと話した。

イギリスではほかのヨーロッパ諸国と比べて起業をすることが容易であるため、EU国籍をもつソマリ人が移住している。衣料品店のように、ソマリ人を対象としたビジネスはソマリ人の数が増えれば増えるほど需要を見込むことができる。ソマリ人が集まるイギリス、とりわけロンドンでは、自ら起

業することで生計を立てることがソマリ人女性たちにとって子育てと両立でき、社会保障制度との関係においても身近な選択肢となっているのである。

3-3 出身地域との繋がりを維持するための送金活動

はじめに述べたように、ソマリ人ディアスポラは越境的に出身地域と繋がりを維持しており、その代表的なものが送金活動である。自営業を営むソマリ人女性たちは将来的にビジネスを大きくして出身地域の支援や発展に貢献したいとも話していた。たとえば、上記の女性Nはつぎのように話していた。

将来はロンドンでビジネスを大きく成功させたいと思っています。そして、出身地域で支援を求めている人々の生活を変えたいのです。でも、今はまだその時ではなく、準備が必要な段階です。

女性Nが営む店の前には、古着を回収するために約1メートルの高さになるゴム製の容器が置いてあった。女性Nは、その入れ物が古着でいっぱいになると出身地域に送っているという。彼女は、ロンドンで暮らすソマリ人女性たちのなかには自分の生活ばかりに気を取られている人々がいるものの、多くの女性たちは出身地域にいる人々を支援したり、家族の生活を経済的に支えていると話した。

実際に、筆者の聞き取り対象者のなかには、出身地域に送金をしていると話す女性たちがいた。彼女たちは、出身地域で争いが起きたときに仲介人を派遣するためにディアスポラがお金を出し合ったり、干ばつによる水不足が発生した際に給水車を派遣するなどの対応をしたと話した。たとえば、オランダ国籍を保有する女性Gは、これまでもオランダで生活しているあいだに衛生環境の整備が行き届いていなかったソマリランドの一地域にトイレを建設するプロジェクトを実施した経験をもち、ロンドンでは2017年2月に干ばつの被害が激しかった地域の状況を改善するための資金を集めようとイベン

トを開いたこともある。筆者がこのイベントに参加した際、会場内では干ばつの様子を映し出す映像が流され、ソマリ人女性たちが用意した軽食が振る舞われた。会場の入り口では干ばつ被害対応のための寄付金が募られ、最終的には800ポンド（日本円で約11万3600円。2017年2月時点でのレート）が集められた。

そのほかにも、毎月決まった額を送金することで、出身地域にいる拡大家族の生活を支える人々もいた。貧困により学校に通うことができない子どもたちの就学支援をしたり、経済的に苦しい親戚の生活費を賄うなどである。ロンドンでソマリ人女性たちは、自らの生計活動に奮闘しながらも、出身地域で暮らす人々や家族の生活を送金によって支え、越境的な繋がりを維持している。

おわりに

本章は、ヨーロッパで最も多くのソマリ人が暮らすイギリスにてソマリ人女性が行う生計活動の実態と特徴を、ロンドンでの聞き取り調査をもとに検討した。そこで明らかになったのは、イギリスの社会保障制度の利用と自営業という働き方を組み合わせて生計を営む姿であった。イギリスで暮らすソマリ人女性たちは、福祉国家として社会保障制度を有し、アングロ・サクソン領域としてビジネスを立ち上げる際に規制が少ない環境を利用しながら、生計を成り立たせようとしていたのである。

イギリスを含めてソマリ人女性ディアスポラのあいだでは、シングルマザーが増加している。本章の考察では、彼女たちの生活が社会保障制度によって経済的に支えられていることが明らかになった。ソマリ人女性たちは、イギリスでもソマリ人男性に対して家計を支える担い手となることを期待していたが、彼らは稼ぎ手としての役割を果たさない。女性たちは従来の性別にもとづく役割分担に固執することなく、まずは生活を成立させること

を優先させていた。社会保障制度の利用は、彼女たちが生活を成り立たせるために重要な生計手段となっていたのである。ほかのEU諸国でもソマリ人女性がシングルマザーとなる傾向に増大があることを鑑みると、各国の社会保障制度と彼女たちの生計は関連していると考えられる。

イギリスにEU国籍をもつソマリ人が移住している理由を精査してみると、ほかのEU諸国よりもイギリスでは仕事を作り出す機会が移民に対して開かれていることが明らかとなった。本論では、オランダからイギリスに移住してきたソマリ人女性たちの経験と取りあげながら、両国ともに労働市場で希望の職につくことは難しいものの、イギリスでは自らビジネスを立ち上げることが比較的容易であるため、ソマリ人がイギリスに移住していたことを示した。起業する機会が開かれている環境にて、ソマリ人女性たちは子育てとの両立や社会保障制度との関連から、生計手段として自ら起業することを選択していた。また、ロンドンで暮らすソマリ人女性たちのこのような経済活動は、自らの生計を成り立たせるだけでなく、出身地域にいる家族の生活を支えることにも繋がっていた。

なお、目下進められているイギリスのEU離脱という動きにより、ソマリ人女性たちにとってロンドンという場所がもつ特徴が変化する可能性がある。イギリス政府は、EU市民が2021年6月31日以降もイギリスに住むための方法としてEU市民在留計画（EU Settlement Scheme）を設け、すでにイギリスで暮らしているEU市民の在留資格と権利を保護する政策を打ち出している。この在留資格を得ることにより、EU市民はイギリスでの就労、国民保健サービス（National Health Service: NHS）の利用、就学の継続、社会保障制度へのアクセス、イギリス国内外への旅行が可能になる。この方法に則れば、現在ロンドンで生活しているソマリ人女性たちの生活が直ちに一変することはないだろう。

しかし、EU離脱によりイギリス経済がどのように変化し、それが人々の購買意欲やイギリスの社会保障制度にどう影響を及ぼすのかは未知数である。ソマリ人女性たちの起業活動は、これらの変動から影響を受けることに

なろう。これからイギリスへ移住しようとするソマリ人女性たちは、それ以前の女性たちと同じような希望をイギリスに抱くことができるのか。ソマリ人女性たちの生計活動は、変化する環境のなかで進められているのである。

〔参考文献〕

〈日本語文献〉

- 安達智史 2013. 『リベラル・ナショナリズムと多文化主義——イギリスの社会統合とムスリム』 勁草書房.
- 井上恒男 2014. 『英国所得保障政策の潮流——就労を軸とした改革の動向』 ミネルヴァ書房.
- 遠藤貢 2015. 『崩壊国家と国際安全保障——ソマリアにみる新たな国家像の誕生』 有斐閣.
- 佐久間考正 2007. 『移民大国イギリスの実験——学校と地域にみる多文化の現実』 勁草書房.
- 島田幸典 2017. 「現代イギリスにおける移民の〈包摂〉——ポスト多文化主義・就労福祉・権利の条件化」 新川敏光編 『国民再統合の政治——福祉国家とリベラル・ナショナリズムの間』 ナカニシヤ出版, 43-68.
- 新川敏光編 2017. 『国民再統合の政治——福祉国家とリベラル・ナショナリズムの間』 ナカニシヤ出版.
- 戴エイカ 2009. 「ディアスポラ——拡散する用法と研究概念としての可能性」 野口道彦, 戴エイカ, 島和博著 『批判的ディアスポラ論とマイノリティ』 明石書店, 15-90.
- 樽本英樹編 2018a. 『排外主義の国際比較——先進諸国における外国人移民の実態』 ミネルヴァ書房.
- 樽本英樹 2018b. 「多文化主義は死んだのか——英国における排外主義の展開」 樽本英樹編 『排外主義の国際比較——先進諸国における外国人移民の実態』 ミネルヴァ書房, 53-84.
- 所道彦 2012. 『福祉国家と家族政策——イギリスの子育て支援策の展開』 法律文化社.
- バナイー, パニコス 2016. 浜井祐三子・溝上宏美訳 『近現代イギリス移民の歴史——寛容と排除に揺れた200年の歩み』 人文書院.
- 水島治郎 2019. 『反転する福祉国家——オランダモデルの光と影』 岩波書店.

〈外国語文献〉

- Abdi, Cawo M. 2007. "Convergence of Civil War and the Religious Right: Reimagining

- Somali Women.” *Signs: Journal of Women in Culture and Society* 33 (1): 183-207.
- Bradbury, Mark 2008. *Becoming Somaliland*. London: Progressio.
- Brubaker, Rogers 2005. “The ‘Diaspora’ Diaspora.” *Ethnic and Racial Studies* 28 (1): 1-19.
- Change Institute 2009. *The Somali Muslim Community in England: Understanding Muslim Ethnic Communities*. London: Communities and Local Government.
- Connor, J.J., Shanda Hunt, Megan Finsaas, Amanda Ciesinski, Amira Ahmed and Beatrice “Bean” E. Robinson 2016. “From Somalia to U.S.: Shifts in Gender Dynamics from the Perspective of Female Somali Refugees.” *Journal of Feminist Family Therapy* 28 (1): 1-29.
- El-Bushra, Judy and Judith Gardner 2016. “The Impact of War on Somali Men: Feminist Analysis of Masculinities and Gender Relations in a Fragile Context.” *Gender and Development* 24 (3): 443-458.
- Hammond, Laura 2011. “Obligated to Give: Remittances and the Maintenance of Transnational Networks between Somalis at Home and Abroad.” *Bildhaan: An International Journal of Somali Studies* 10 (11): 125-151.
- 2013. “Somali Transnational Activism and Integration in the UK: Mutually Supporting Strategies.” *Journal of Ethnic and Migration Studies* 39 (6): 1001-1017.
- Hansen, Peter 2007. “Revolving Returnees in Somaliland.” In *Living Across Worlds: Diaspora, Development and Transnational Engagement*, edited by Ninna N. Sørensen. Geneva: IOM (International Organization for Migration), 129-150.
- Hopkins, Gail 2005. “Gains, Losses and Changes: Resettlement of Somali Women Refugees in London and Toronto.” Ph.D. Thesis. University of Sussex.
- Horst, Cindy 2004. *Money and Mobility: Transnational Livelihood Strategies of the Somali Diaspora*. Geneva: Global Commission on International Migration.
- 2008. “The Transnational Political Engagements of Refugees: Remittance Sending Practices amongst Somalis in Norway.” *Conflict, Security & Development* 8 (3): 317-339.
- 2017. “Implementing the Women, Peace and Security Agenda? Somali Debates on Women’s Public Roles and Political Participation.” *Journal of Eastern African Studies* 11 (3): 389-407.
- Ingiriis, Mohamed H. and Markus V. Hoehne 2013. “The Impact of Civil War and State Collapse on the Roles of Somali Women: A Blessing in Disguise.” *Journal of Eastern African Studies* 7 (2): 314-333.
- Jones, Trevor, Monder Ram, Paul Edwards, Alex Kiselinchev and Lovemore Muchenje 2014. “Mixed Embeddedness and New Migrant Enterprise in the UK.” *Entrepreneurship and Regional Development* 26 (5-6): 500-520.
- Kloosterman, Robert C. 2003. “Creating Opportunities. Policies Aimed at Increasing

- Openings for Immigrant Entrepreneurs in the Netherlands.” *Entrepreneurship and Regional Development* 15 (2): 167-181.
- Kloosterman, Robert C., J. van der Leun and Jan Rath 1999. “Mixed Embeddedness: (In)formal Economic Activities and Immigrant Businesses in the Netherlands.” *International Journal of Urban and Regional Research* 23 (2): 252-266.
- Lewis, I. M. 1961. *A Pastoral Democracy: A Study of Pastoralism and Politics among the Northern Somali of the Horn of Africa*. Oxford: Oxford University Press.
- 1962. *Marriage and the Family in Northern Somaliland*. Kampala: East African Institute of Social Research.
- Lindley, Anna 2009a. “Between ‘Dirty Money’ and ‘Development Capital’: Somali Money Transfer Infrastructure under Global Scrutiny.” *African Affairs* 108 (433): 519-539.
- 2009b. “The Early-Morning Phonecall: Remittances from a Refugee Diaspora Perspective.” *Journal of Ethnic and Migration Studies* 35 (8): 1315-1334.
- Open Society Foundations 2014. *Somalis in London*. New York: Open Society Foundations.
- 2015. *Somalis in European Cities: Overview*. New York: Open Society Foundations.
- Ram, Monder, Nicholas Theodorakopoulos and Trevor Jones 2008. “Forms of Capital, Mixed Embeddedness and Somali Enterprise.” *Work, Employment and Society* 22 (3): 427-446.
- Sepulveda, Leandro, Stephen Syrett and Fergus Lyon 2011. “Population Superdiversity and New Migrant Enterprise: The Case of London.” *Entrepreneurship and Regional Development* 23 (7-8): 469-497.
- UNDP (United Nations Development Programme) 2009. *Somalia’s Missing Million: The Somali Diaspora and Its Role in Development*. Nairobi: UNDP.
- 2011. *Cash and Compassion: The Role of the Somali Diaspora in Relief, Development and Peace-Building*. Nairobi: UNDP.
- van Liempt, Ilse 2011a. “‘And Then One Day They All Moved to Leicester’: The Relocation of Somalis from the Netherlands to the UK Explained.” *Population, Space and Place* 17 (3): 254-266.
- 2011b. “From Dutch Dispersal to Ethnic Enclaves in the UK: the Relationship between Segregation and Integration Explained through the Eyes of Somalis.” *Urban Studies* 48 (16): 3385-3398.

〈統計資料〉

- Office for National Statistics 2015. “Population of the UK by Country of Birth and Nationality, March 2000 to February 2001.” (<https://www.ons.gov.uk/peoplepopulationandcommunity/populationandmigration/internationalmigration/>

datasets/populationoftheunitedkingdombycountryofbirthandnationality, 2019年2月19日最終アクセス).

- 2018. “Population of the UK by Country of Birth and Nationality, July 2017 to June 2018.” (<https://www.ons.gov.uk/peoplepopulationandcommunity/populationandmigration/internationalmigration/datasets/populationoftheunitedkingdombycountryofbirthandnationality>, 2019年2月19日最終アクセス).

〈イギリス社会保障制度〉

ユニバーサル・クレジット (<https://www.gov.uk/universal-credit>, 2019年6月4日最終アクセス).

児童手当 (<https://www.gov.uk/child-benefit>, 2019年6月4日最終アクセス).

家賃補助 (<https://www.gov.uk/housing-benefit>, 2019年6月4日最終アクセス).

〈イギリスEU市民在留計画〉

<https://www.gov.uk/settled-status-eu-citizens-families> (2019年6月4日最終アクセス).

付表 聞き取り実施者

	出身地	年齢 ¹⁾	英国 入国年	英国 入国方法	国籍	庇護申請した 国/年 ²⁾	婚姻状態	生計活動として 女性が答えた内容
A	ソマリランド	70歳	2011	家族再統合	イギリス		離婚	年金
B	ソマリランド	42歳	2005	EU域内移動	ドイツ	ドイツ/1990	婚姻関係維持	自営業
C	ソマリランド	39歳	2002	EU域内移動	オランダ	オランダ/1990	婚姻関係維持	フルタイム
D	ソマリランド	47-56歳	1991	庇護申請	イギリス	イギリス	シングルマザー	自営業
E	ソマリランド	48歳	1990	庇護申請	イギリス	イギリス	シングルマザー	フルタイム
F	ソマリア南部	30代	2005	庇護申請	イギリス	イギリス	不明	フルタイム
G	ソマリランド	54歳	2006	EU域内移動	オランダ	オランダ/1994	シングルマザー	パートタイム
H	ソマリランド	45歳	2001	不明 ³⁾	イギリス	イギリス	婚姻関係維持	パートタイム
I	イギリス(両親はソマ リア南部出身者)	30歳		出身国	イギリス		シングルマザー	自営業
J	ソマリア南部	60歳	2007	EU域内移動	オランダ	オランダ/1998	死別	自営業
K	ソマリア南部	40代	1998	庇護申請	イギリス	イギリス	婚姻関係維持	自営業
L	ソマリア南部	50歳	2003	庇護申請	イギリス	イギリス	シングルマザー	自営業
M	ケニア(父親がソマ リア出身者)	45歳	1989	庇護申請	イギリス	イギリス	シングルマザー	失業中
N	ソマリア南部	44歳	2000	庇護申請	イギリス	イギリス	シングルマザー	自営業
O	ソマリア南部	70歳	2005	庇護申請	イギリス	イギリス	死別	年金
P	ソマリランド	57歳	1991	庇護申請	イギリス	イギリス	婚姻関係維持	自営業
Q	ソマリア南部	48歳	2010	家族再統合	不明 ⁴⁾		婚姻関係維持	自営業
R	ソマリランド	52歳	2013	EU域内移動	オランダ	オランダ/1991-1992	シングルマザー	自営業
S	ソマリランド	44-47歳	2005	EU域内移動	スウェーデン	スウェーデン	シングルマザー	パートタイム
T	ケニア(父親がソマ リア出身者)	36歳	2007	EU域内移動	オランダ	オランダ/1988	婚姻関係維持	パートタイム
U	ソマリランド	50代	1989	庇護申請	イギリス	イギリス	婚姻関係維持	パートタイム
V	ソマリランド	40-50代	1994	庇護申請	イギリス	イギリス	シングルマザー	パートタイム

(出所) 筆者作成。

(注1) ハイフンで繋いでいるものは実年齢とパスポートの年齢に差があるためである。年代で示しているものは、回答者が年齢を答えたくないと言ったため、筆者の推測である。

2) イギリス以外で庇護申請した場合には申請時の年を記載している。

3) 女性Hは2001年にイギリスで暮らし始めた。家族はイギリス国籍を取得したと述べたが、彼女自身はイギリス国籍を申請してい

4) 女性Qは家族再統合によりイギリスで暮らし始め、家族はイギリス国籍を取得したと述べたが、彼女自身はイギリス国籍を申請してい